36　医の博物館所蔵の解剖絵巻「解観大意」について

佐藤　利英，樋口　輝雄
日本歯科大学 医の博物館

A. Vesaliusが『ファブリカ』を1543年に刊行して2世紀余りのち，わが国における人体解剖の記録は，山脇東洋の『蔵志』（1759年）にはじまり河口信任による『解屍編』（1772年）が上梓された．そして杉田玄白らの『解体新書』（1774年）に収録されたヨーロッパの解剖図に啓発され，医家たちは公許のもとに各地で刑死体の解剖を行い，実見した結果を記録した．ヒトの体内，臓器，解剖の過程を収載した絵図は刊本あるいは書写本，巻子本として後世に伝わっている．「解観大意付図」は1812（文化9）年，小森桃塢（1782～1843年）と藤林普山（1781～1836年）が京都で行った男性の刑死体の解剖記録である．図は桃塢の門人・波多野貫道が描き，当時の西洋解剖書には記載されていなかった「乳糜管（奇縷管－腸にあるリンパ管）」を実際に観察し初めて描写した．

この「解観大意」巻子本は，国立科学博物館（以下「科博本」），東京大学医学図書館（以下「東大本」）杏雨書屋（以下「杏雨本」）が所蔵しており，本館ではそれらの写し（模本）と思われる絵巻2点を保存している．科博本は「解観大意」，東大本は「文化壬申解剖解観図」，杏雨本は「波多野・山崎氏文化九年解体図譜」の表題がある．なお日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成　第2巻』（三一書房，1977年）に京都大学医学図書館蔵という「解観大意」の図版が掲載されているが，所在の有無は不明である．

本館所蔵の絵巻2種は，10数年以前に京都の古美術商を経て寄贈されたもので，題簽はなく解剖絵巻の下図と思われた．各種文献を参照したところ「解観大意」の模本であることが判明した．両者とも彩色されているが裏打ちなど表装されておらず，仮に「模本A」「模本B」と名付けると，模本Aには木の軸がつけられ長さ7 m17 cm×紙高26.5 cm，19枚の料紙を貼り合せてつなげている．描写は頭部から始まり，各部の臓器を描き，絵の脇に名称や短く解説が書き込まれている．全体のほぼ中央に乳糜管の描写がある．末尾に「余未だ嘗て画法を学ばず」云々と漢文の後跋があり，「文化壬申抄冬　和田路寫併記」と記されていることから，文化9年（1812）初冬の解剖記録であることがわかる．一方，模本Bには軸がなく，長さ7 m10 cm×紙高27.7 cm，絵の輪郭線は太く彩色も色濃い．また描写の順番が模本Aと逆であることから，一枚につなぎ合わせる際に逆から貼り合わせたものと考える．両者を比較すると図や筆致に違いが散見され，模本Aには胸部・背部の筋の図がなく，模本Bには頭部の描写や後跋などの文章は貼付されていない．

東大本は現在Web上で公開されており，解剖図のあとに和田路による後跋，文章は波多野貫道の「解観大意」，壷井純菴と川端玄同による「解観筆記」，解剖に立ち会った50名の姓名に続き，巻末に胎盤と嬰児の絵が張り合わされている．壷井らの「解観筆記」では，「刑屍二十四歳男子／局尺ヲ用ヒテ之ヲ度ニ結喉ヨリ陰所ニ至ルマテ其長廿二尺／手胛骨頭ヨリ中指端ニ至ルマテ二尺二寸五分……」，最後に「首ノ截処ニ於テ気管食道脊椎頸血脉［割註：血脉ハ動脉ト静脉ヲ共ニ云］ヲ見ルナリ仍ソノ図ヲ写シヌ」と解剖順序を記す．中野操氏は『医譚』復刊第9号（1955年）で，日本で初めて解剖術式を記した書として橘南谿（宮川春暉）の『解体運刀法』を紹介した．南谿は1783年に伏見で刑死体・平次郎の解剖を主宰したと伝えられる．『解体（解屍）運刀法』では，最初に「……先ツ首ノ切口ヲ図スヘシ，此時気道，食道，大筋，脊骨髄等ヲ委敷クミルヘシ」と述べ，以下解剖の順序を詳しく記述し「右四十五段，次第ノ乱レサルヨウ解スヘシ」と記している．「平次郎解剖図」など江戸時代の解剖図は，視覚的に解剖の順序を捉えられることから，絵巻形式の巻子本となったとも思われるが，本館所蔵の「解覧大意」2種と他館所蔵本とを比較して報告したい．